
たった一人のための神話

花浅葱羽羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった一人のための神話

【Nコード】

N9161K

【作者名】

花浅葱羽羅

【あらすじ】

唯の平凡な学園生活を少女は送っていた。別に其れに退屈することも、嫌になる事も、少女は無かった。その平和を願うことだっしてしなかった。する必要を見出せなかった。

それほど幸福で、平凡な日々だった。

しかし、ある日少女はナイフを手にした。

己が生きるか、死ぬか。そんな神の座を巡る10人の候補生に少女は選ばれる。選択肢は二つだけ、神になるか地獄に堕ちるかのだち

らかだった。

「おめでとう。君は『神の候補生^{エンジェル}』に選ばれた。」

プロローグ a - 神話

古来より、

神は一〇〇年足らずしか其の地位に就く事を、世界あらしが許さなかつたという。

故に神は、次の候補を一〇つ選ぶ事にしたという。

故に世界は、運命さだめを其の一〇つの者達に授けた。

神エンジェルの候補と定められた者は、数え年一五歳になつた其の年に、

世界から、神と文を交わした罰により、

霧の様に消え去るといふ、其の運命を

世界が授けたといふ。

そして、其の運命を跳ね除けた神の候補唯一つが

神と成ることになつたといふ。

そして時は、平成の世へと至る。

プロローグ a - 神話（後書き）

初投稿の花浅葱羽羅といます。よろしくお願ひしますm（）（）

m

ちなみに、主人公は女の子です。

キーワードは多分「アクマ」だと思います。「エンジェル」より、

「アクマ」だと思います（曖昧）

あ、プロローグの「ー〇つ」という表現は仕様ですので、誤字ではないです（汗）

無事完結できるよう頑張ります。

主な登場人物（前書き）

人物説明です。

主な登場人物

主な登場人物

白林 みさき (しらばやし みさき)

本作の主人公、十四歳の少女。

尾崎 守斗 (おさき もりと)

主人公のクラスメイト。引っ越してきた。

三日月 恋 (みかづき れん)

みさきの親友。クラスメイトでもある。

霧柚 羽乙女 (きりゆず はおとめ)

みさきの隣のクラスの委員長。本の虫。

織輪 真咲 (おりわ まさき)

みさきの隣のクラスの体育委員。

ソラ (そら)

みさきが屋上に行くとき居る少年。

怜 (さとし)

みさきの前に現れる美しい少年。

本木 佐織 (もとき さおり)

本木家の一人息子。現在行方不明。

ブローグ b・A n d、t h e b o y b e c a m e a p a r t f r o

英語のサブタイトルと日本語のサブタイトルは一致しない仕様です。
ご注意ください。

ブローグ b - A n d , t h e b o y b e c a m e a p a r t f r o m
r t f r o m o t h e r s .

【全ては暗黒の世の底へ】

「いらっしやませー」

「ごめんください、店員さん。」

「雪里ゆきりのところの坊やじゃないか！」

「久しぶりです。其の紅い薔薇をいただけませんか。」

「了解だよ。しかし、本当に久しぶりだねえ。こんなに大きくな
って…」

「此処を離れて十年か、長いようで短いものだねえ。」

「…本当に」

久しぶりですね。

其の言葉をその店員は聞くか聞かないかの内の早業だった。

先ほどまで気さくに話していた十四ほどの少年の手が、学生鞆の中に入った後、出てきたのは黒光りする拳銃だった。

幸いか否か、その店は人通りの少ない位置にあり人は居なく、さらに近くにある、大きな道路を大型トラックによる騒音で、乾いた拳銃の音は掻き消された。

いや、本当の理由はそうではないのかもしれないかもしれなかった。

「だけど、それじゃあ僕の名前を知っているのでしょうか。」

少年は拳銃を再び鞆にしまいながら呟く。鞆を開いたときに、ちらりと銀の柄が太陽の光で光った。

少年の髪は黒く、右目は黒、左は紺のオッドアイだった。其の表情は心底楽しそうに笑っていた。其の表情はそれ以外の意味を成さなかった。

少年は店の外に出て歩き出す。

真っ黒なパーカーに包まれて隠されたその背中には、異様な傷があった。痛々しい、

一対二枚、二対そして一枚の羽の様な傷だった。

突然少年がポケットに入れていた手を握りしめて、眉を寄せる。

「また一人殺されたか。」

ささやきは小さく、道行く人には聞こえない。

背中の傷は三対の羽へと変わっていた。

第一話・Ten candidates・alive remainder

英語のサブタイトルと日本語のサブタイトルは一致しない仕様ですのでご注意ください。

第一話・Ten candidates・alive remainder

第一話・Ten candidates・alive remainder
inder.

【アルストロメリアの花束を】

「…つつそだあ」

みさきは、ぐったりとクラス表の前でうなだれた。他にも生徒が数人居て喜びの声や残念そうな声、はたまた叫び声も聞こえる。まだ発表されて間のない早い時間だ。普段ならみさきも寝ている時間帯だ。

「こんなところに居ても仕方が無い。」

みさきはすり落ちていた紺色の鞆をかけなおして新しい教室へと駆け出した。

ガラッ

「おはようっ」

「はよ、みさき。」

「なんだ、恋いたの」

「なんだとはなんだ、おい。」

「はいはい。」

みさきの肩を通りすぎた黒髪とは違って、恋は地毛の茶髪を短く切つてある。髪型や低めの声それに男らしい態度で男子に間違えられるが、女の子である。しかも見た目を裏切らない運動神経の持ち主である。

「ところでみさき。」

「うーん何。」

「今何時だ」

「それぐらい自分で見なよ」

なんでこんなのと親友なのだろう。

みさきは頭を押さえる、同時にため息。最初は小学校一年、二年とクラスが同じなだけだった。三年から腐れ縁を感じてそれまで挨拶程度だった仲がお互いの家に遊びに行くまでになった。

それから、四、五、六年そして中学一年とずっと一緒のクラスである。正直、先生に訴えようかと思った。そのとき、扉の開く音がした。みさきと恋がその扉を見る。

「みさきさん」

「あ、委員長。」

委員長とみさきが呼んだ人物がいた。黒くて長いウェーブのかかった髪と同じ黒の瞳。白い肌と銀のフレームの眼鏡、ピンクに色づく唇。さらに、鈴の様な声。それら全てがまるで人形のように整った形でその少女についていた。

「私はもうみさきさんと同じクラスの委員長じゃないわ」

「ごめんね、委員長の印象が強くて…でもまたやるのですよ。」

「立候補者が居なければね、はい。」

「何、」

みさきが出した手の中に落とされたのはパールピンクの携帯だった。

みさきは急いでそれを鞆にしまう。携帯が禁止な訳ではないが、恋にイタズラでもされたら大変だからである。

「驚いたー…ありがとう、羽乙女ちゃん。」

「お礼なんて言わなくて良いわよ、見つけたのは私じゃないもの。」
「え。」

「公園に落ちていたって言うていたわ、織輪君が。」

みさきは記憶の糸をたどって織輪を思い出す。黒い髪を短く切った体格のいい、運動神経のよさそうな人物だ。

そういえば去年のクラスメイトだった。思い出して、謝りたくなかった。すっかり忘れていた。

「ありがとうって伝えておくわ。」

そう言って羽乙女はクラスに戻ってゆく。その後姿を眺めながらみさきは羽乙女と出会った時のことを不意に思い出した。

たしか、小学校の五年生と頃だった。隣のクラスの転校生として羽乙女はみさきと恋の通う学校にやってきた。『人形』のように可愛い転校生としか認識していなかったみさきが羽乙女とかかわりを持ったのは、転校してから間のなかった頃だった。

そのときも携帯を落としたみさきは図書室で携帯を探していた。親が共働きで中々家に帰ってこないため持たされたピンクパールの携帯電話。見つからなくて日も暮れて、泣きたいような気分になったときだった。図書室の扉が突然ガラツと開いてそこに居たのは、聞いたのは、

『みさきさん』

鈴の鳴るような羽乙女の声だった。

啞然とするみさきに羽乙女はすたすと近づいて、座り込んでいるみさきと視線を絡ませて手を出した。

『落ちていたのを偶然拾ったの。貴方なのでしょう。』

近くの人が教えてくれたわ。そう続けて言っただけで肩をすくめる。そんな細やかな動作さえもが夕日に照らされてオレンジ色になって、人形に命が吹き込まれてゆくようで、本当に綺麗な人間なんだ。と思っただ。

その決定打は羽乙女が見せた笑顔だった。

『もうなくさないようにね。』

とても、人間らしく羽乙女は笑った。人形なんて嘘だと思った。どこかが、帰りの遅い親が見せる柔らかい微笑と似ていると思った。それが、羽乙女とみさきの出会いだった。

(そのあと、すぐに恋とも打ち解けたなあ。)

「何ポーっとしてんの?」

「…何でもない。」

昔の記憶に浸っていたら、恋が変な顔で問う。みさきは笑顔で何でもないといった。

「そつえば、転校生がいるんだな。」

「へ?」

「…ちゃんとクラス表見た?」

「ああ、そつえば。」

クラス表の一番下に見慣れない名前があった。そんな大きな学校

ではないので、見知らぬ名前と言うのは、珍しい。

「転校生だったんだー。」

恋があきれた目で見てきたので、みさきはその頭を生徒手帳で叩いた。

ガラッ

新しいクラスメイト達の目が教室のドアに集まる。其処に居たのはどうやら転校生らしかった。

黒い髪と瞳の男の子。濡れた黒い傘のような髪は男の子らしい長さで切られていて、瞳はデイベアの目のように真っ黒だった。肌は白くて、滑らかそうに見えた。そして、唇は紅を塗ったように赤く、白い肌によく生えた。

「日本人形が男の子になったみたい……」

「ああ。」

恋も美しい転校生から視線を外せなかった様で、上ずった声で相槌をうった。

その後、転校生の後ろから新しい担任の先生が来て、転校生の名前が『尾崎 守斗』というと伝えられた。ホームルームが終わると、みさきは転校生に学校の案内をするように頼まれた。正確には恋もだったのだが。

「はじめまして、私は白林みさき。」

「あたしは三日月恋。」

「僕は尾崎守斗です。」

はにかむように守斗は笑った。つらねたように恋も、みさきも笑った。

アルストロメリアの花束を貴方にあげましょうか。

花言葉はたくさんありますが、

ここでは、『幸福な日々』と言うのが一番お似合いですよ。

第一話・T e n c a n d i d a t e s ・ a l l i v e r e m a i n d e r

笑えるほど、ファンタジー要素がないorz

第二話・They exist only so that the girl

英語のサブタイトルと日本語のサブタイトルは一致しない仕様です
のでご注意ください。

第二話・They exist only so that the girl

第二話・They exist only so that the girl may take to the most wonderful position.

【蛋白石は砕かれた】

その後、みさきは恋と共に守斗に学校を案内した。教室、理科室、家庭科室…聞かれた事にも答えた。

「綺麗な学校ですね。」

「去年立て替えたからね。」

「耐震工事ってヤツだよ。」

「そうなんですか。」

去年の先輩はプレハブ校舎で大変そうだった。と、みさきが言うと、恋が頷いた。そんな風に時間が過ぎて、教室に帰ったら、もう帰りの会だった。急いで片付けて、恋と途中まで一緒に下校した。

「ただいまー」

玄関の扉を開けて、大きな声で帰宅を知らせる。返事は当然返ってこない。親は帰りが遅いのが当たり前だ。

玄関の鍵を閉めて、靴を脱ぐ。すぐにしゃがんで自分の靴をそろえて置く。幼い頃からの習慣だった。そして、立ち上がる。階段は玄関の目の前にあるので、自分の部屋に上がるために階段に一步步近づいた。その時だった。

「白林 みさき」

名前を呼ばれた。

「…えっ」

驚いて、振り返る。誰も居ないはずの玄関に少年が居た。

その少年は真っ白のフード月のローブを羽織っていた。髪は金色で、瞳は空の色の様に白の混じっている色ではなく、純粋な青だった。肌は陶器の様に真っ白で、どうやら日本人ではないらしかった。声は聞き惚れる様なボーイソプラノ。

「中学二年生。十四歳。両親は共働きで帰りが遅いため、鍵を持ち歩いている。」

淡々とボーイソプラノはみさきについて述べてゆく。

「そして、」

「ちよつと!」

まだ語ろうとするのをみさきが止める。少年は開きかけた口を閉じて、みさきを視線で射る。

「あんた誰なの？勝手に入ってこないでよ!」

「…」

何も言わず、少年は消えた。文字通り、まるで其処には元々何も無かったように『消えた』。

いや、元々何も無かったのだ。そう言い聞かせて、階段を上る。

上り終わってすぐ近くの自分の部屋の扉を開ける。すぐに飛び込んできた光景に目を見開く、鼓動が早くなる。何より信じられなかった。

「なんで、いるの。」

玄関に現れた少年がいた。皺一つ無い白いローブをさっきと同じ様に羽織っている。表情もさっきと変わらず、読めない。

「…君に伝えに来た。」

「は？」

少年は一切表情を変えずに言う。さっきと同じように淡々という。そして、更に続ける。

「おめでとう。君は『神の候補生』^{エンジェル}に選ばれた。」

エンジェル？

「…何、それ。」

少年は懐から銀に光るナイフを出す。食事に使っような、先の尖っていないもの。デザインはシンプルで何か特徴があるようではない。そのナイフを少年は柄をみさきに向けて、みさきの目の前に突き出す。

「しかし、それはただ選ばれただけ。白林みさきの選ぶべき選択肢が増えただけ。」

「…何の話をしているの？」

「あの時、携帯電話を落としたのは、

図書室で彼女と出会う未来を自分自身で選んだからだ。」

「だから、何言ってる……」

「あの時、彼の案内を引き受けたのも、
彼との関係を作り出す未来を自分自身で選んだだけ。」

「ちよっと、人の話をっ」

「そう、だから」

選べ。

少年は、静かに淡々と告げた。

その少年は相変わらず、ナイフの柄をみさきに向かわせて持っている。みさきの目の前に、銀色の。その銀色がやたらと鮮やかに、美しく見えて、思わず体が動いていた。

白い少年の指が、ナイフから離れる。落ちる音が聞こえないのは、

「君は選んだ。その未来が」

みさきがナイフを握ったからだ。

「君が選んだその時に始まった。」

少年が言い終わる前に始まった激痛。背中が燃える様に熱かった。

「うあああああああああッ」

オパール
蛋白石が砕けてしまった様ですね。

宝石言葉は『希望』『幸福』『安楽』などですから、

つまりは、そういう事なのです。

第二話・They exist only so that the girl

やっと、ファンタジー要素登場？

第三話・The truth is crueler than any o

英語のサブタイトルと日本語のサブタイトルは一致しない仕様です
のでご注意ください。

第三話・The truth is crueler than any o

第三話・The truth is crueler than
any one all over the world .

【??が逆位置に固定された】

凄まじい痛みにも、みさきの視界は暗黒に包まれた。意識を飛ばして、その場に倒れた。ブレザーの制服の下の白いシャツは、きつと血で真っ赤に染まっているだろう。

少年はただ、その光景を眺めていた。ただ、何もせずに眺めているだけだった。

「……」

その瞳は何も映さない、曇りきったガラスの様になっていた。しかし、そのガラスを割ったその先に、灼熱の炎が燃えていた。其れはとても紅かった。

「……ん。」

目が覚めた。真っ先に視界に入ったのは自分の部屋の天井だった。次に視界に入ったのは、うつ伏せる母の頭だった。どうして自分のベッドにうつ伏せているのだろう。いや、何故私はベッドの上にいるのだろう。

混乱し、さらに寝起きの様な状態の頭はまるで使い物にならず、ただ母の頭を眺めていた。突然、もぞり、と母が動いた。頭を上げ

て、母と視線が絡んだ。

「みさき、起きたのね！母さんよ、分かる？」

「うん。分かるけど…」

「よかった…玄関で血まみれで倒れていて、吃驚したのよ。救急車は出られないって言うし…」

玄関で、血まみれで倒れていた。

ああ、思い出してしまった。みさきは動きの鈍かった脳が覚醒して行くのを感じた。

「でも、誰が包帯を巻いてくれたのかしらねえ…それよりも、お父さんにも電話しておくわね。あの人も心配していたのよ？」

そう言って、母はみさきの部屋を出て行った。訪れた静寂はただ痛かった。

ふと、みさきは自分が制服のままだったという事に気が付いて、着替えようと思いつながらベッドから起き上がった。あの、燃える様な痛みは嘘だったように消えていて、逆に違和感があった。シャツのボタンを外していると、そこにあったのはみさきの一般的な肌色ではなく、真っ白な包帯だった。

誰が包帯を巻いてくれたのかしらねえ

母が言っていたのはこれのことだったのだ。

みさきは巻かれた包帯を見る。鎖骨よりも五センチメートルほど下から、尾？骨の少し上まで、背中全体を隠すように巻かれていた。きつくなく、少し緩いぐらいで、とても丁寧に、綺麗に巻かれていて、驚く。

まあ、いつまでも眺めているのもどうかと思い、包帯の所為で少し動きにくい体で私服に着替える。

「あれ？」

黄色のTシャツと白いスカート、ピンクのパーカーを着てから、ぐるりと部屋を見渡すと、机の上に見慣れない何かが置いてあった。其れは銀色で、細長い、

「あの時の、」

ナイフだった。

「君が選んだその未来が、君が選んだその時に始まった。もう、始まってしまっている。」

少年の声が、確かに後ろの扉の方から聞こえた。

「何者なの！」

みさきはあまりの恐怖に振り返れなかった。机に向かったまま、ナイフを手にとらずに叫んだ。しかし、あの時の少年は質問に淡々と答える。

「僕は『^{アクマ}真実を執行する者』。与えられた固有名詞は『^{みさき}怜』。」

アクマ、怜、少年はそう名乗った。

「^{エンジェル}神の候補生に対し、運命 すなわち真実を執行するのが役目。」

少年 怜は扉の前に立つたまま動かない。最もみさきは怜のほうを向いていないので、そんなことは分からない。ただ、声のする方向は変わらないので、動いていないとしか思っていないかった。立っているか座っているかなど分からなかった。

「一体何なの、それ。意味が分からないのだけど。」
「其れを伝えに来た。」

再び、みさきはぞつとするような恐怖に陥った。未知の境域に足を入れる際に、ごく自然に人間が体験する恐怖だった。だが、この全てが科学によって成り立つような世界で、未知のものに出会い、恐怖することなど殆どないに等しい、つまり、みさきにとってこの『恐怖』さえも未知のものだった。底知れぬ恐怖がみさきを襲った。怜はそんなみさきの様子など、まるで気にしない様子で話を続けていた。

「白林みさきの運命を伝えに来た。」

透き通るボーイソプラノが静寂に響いた。

まず、神が世界を創造した。世界を命で潤し、太陽で輝かせた。幾つもの年月が過ぎ、いつしか世界は意思を持った。それは「生きたい」という、ごく単純なものだった。世界は神という母の腕ですくすくと成長し、神は老いて、衰弱した。世界は巨大なものとなったが、神に頼って育った為、細かいことを考える為の組織が育たなかった。世界とは元々神が存在しないと死滅するものだった。なので、世界は「生きたい」という意思の下、新たに神を作り出すことにした。そして、世界で生きる生命体の中で一〇つ、世界を無事に

生きさせることの出来る存在を、老いた神に選ばせた。
それが、神の候補生^{エンジェル}。

「白林みさきはそれに選ばれた。ただ、選択肢は与えられていた。其れは世界の作った規則^{ルール}だ。もし、ナイフを握らなかつた場合、候補から外されることになっていた。」

「…そんな、」

みさきの言葉に耳を傾けずに、少年は語り続ける。

神の候補生たちは世界の作った規則、それは言い換えれば運命というものよって縛られた。

- 一、選ばれる神の候補生は一〇つ。
 - 二、神の候補生にはそれぞれにナイフが与えられる。
 - 三、神の候補生から神になれるのは一つ。
 - 四、数え年一五になるまでに神が一つにならなかつた場合、全ての神の候補生が消える。
 - 五、世界の意思にそぐわない行動を取つた神の候補生は消える。
- そして、それらを執行する役目を担うのが真実^{アクマ}を執行する者と定められた。

「…」

さっぱり意味が分からなかつた。

「白林みさきの背中に傷が刻まれた。その傷が四対と一つの翼となつたとき、最後の傷を世界が刻む。そして白林みさき、つまり神^{エン}の候補生^{ジェル}は神となる。」

「背中…」

みさきはゆっくりとした動作で背中に手を当てた。一つ、二つと、指先や手のひらに傷の凹凸が伝わった。

「すでに、六つ消されている。」

「え、」

消されていると、怜は言った。それに反応してみさきはとうとう後ろに勢い良く振り向いた。

あの時と変わらない、皺一つない白いローブを纏い、金色の髪と青い瞳を白い肌と一緒に持つ美しい少年。つまり怜は青い瞳で確かにみさきを射抜きながらも、何も写してはいなかった。少なくとも、みさきはそう感じた。

「消されているってどういうことなの。」

みさきは震えながらも、ほのかに怒りを含ませた声で言った。

怜は一回瞬きをして、再びみさきを見た。そして言った。

「殺されたということだ。」

神の候補者か、エンジェル 眞実アクマを執行する者によって。

???とはタロットの大アルカナ???のことですよ。

正位置では、希望やひらめきなどの意味を持つのですが

逆位置なので『失望』などの意味を持ちますね

第三話・The truth is crueler than any o

私はタロットにあまり詳しくないので、一応調べたのですが…間違っていたらすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9161k/>

たった一人のための神話

2010年10月10日04時17分発行